

日本人と妖怪

—日本文化における意識の変容と美術表現の変遷—

Japanese People and Yokai
-Changing Consciousness of Japanese Culture and Transition of Art expression-

文化研究／論文

地域キュレーションコース

中野 寧々

Nakano Nene

研究目的

妖怪とは本来、未知で不可解な現象に名前をつけ、姿形を想像し畏怖する対象だった。しかし、コロナ禍には疫病を防ぐご利益があるとされる妖怪「アマビエ」のイラストをSNSに投稿するブームが起こり、それを機に日本各地でアマビエがグッズ化された社会現象を見ると、現代の日本人にとって妖怪は恐れる対象ではなく、キャラクターとして親しみや愛着が持てる身近な存在であることは明白である。そこで、いつどのようにして、日本人と妖怪の関係性が好意的なものへと変化したのか、そして、なぜ日本人は妖怪に魅了され続けるのかについて明らかにすることを本論文の目的とする。

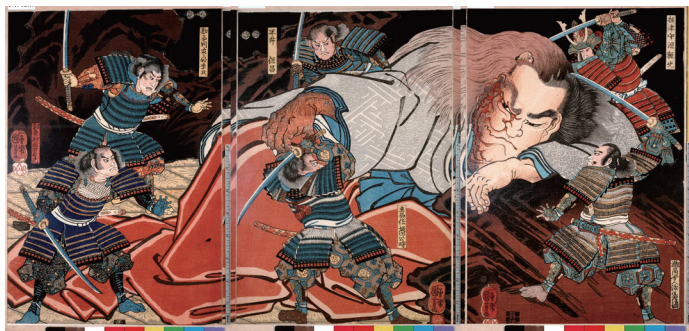


図1 歌川国芳《大江山酒呑童子》(1850) 出典:ARC 浮世絵・日本絵画ポータルデータベース

方法と考察

妖怪について調査する中で、古代神話から現代カルチャーにまで使われている「擬人化」の手法に着目した。日本では古来より、太陽や月、海、雨、大きな木や岩、動植物などの世の中に存在するもの全てに神が宿っていると考え、その神々を総称して「八百万の神」と呼ぶ。「八百万の神」そして「アニミズム」の思想は日本の文化や宗教に深く根付いており、日本人の精神に染みついている価値観である。そのため、人間以外のものを人間に見立てて表現する「擬人化」の手法は、日本人の性質や価値観、時代の変化、さらには日本人と妖怪の関係性の変遷がわかりやすいと考えたため、人の形をしている妖怪を考察の対象とすることにした。

また、人の形をしている妖怪の中でも、古代より擬人化されていた妖怪と、現代になって人型で描かれるようになった妖怪の二種類に分類できることが判明した。そこで、「古代から人型で描かれていた妖怪」と、「異形の姿から、時代の変化に伴って人型で描かれるようになった妖怪」の二種類に分類して、代表的な妖怪を選出することにする。そして、それらの妖怪のさまざまな年代の図像を収集し、時代ごとの姿形の特徴を比

較する。また、妖怪の伝承やキャラクター化された妖怪の設定についても調査し、その妖怪を見た時に鑑賞者が抱く感情を時代ごとに考察、比較することで、日本人と妖怪の関係性の变化について読み解く。



図2 歌川国芳《源頼光 四天王 土蜘蛛退治之図》(1843) 出典:刀剣ワールド財団

結論

日本人が妖怪に対して好意的な印象を持つようになったのは、『ゲゲゲの鬼太郎』や『妖怪ウォッチ』による影響が大きいと考えられる。江戸時代以前は、妖怪は人間を襲う恐ろしい存在であり、土蜘蛛と酒呑童子に関しては、源頼光というヒーローに退治される悪役・引き立て役のような存在として描かれていた。しかし『ゲゲゲの鬼太郎』で妖怪に親しみやすい容姿や性格、日本人が共感できる背景が与えられ、それがアニメとして全国に放送されたことで、現代の日本人の中で妖怪の印象が好意的なものへと変化した。さらに『妖怪ウォッチ』では、より子供たちに愛されるようなキャラクター化を行い、仲間として共に戦うという設定にしたことで、江戸時代では悪役だった妖怪が仲間やヒーローという存在に変化した。また、擬人化により美しい姿形の妖怪を作ったことで大人も楽しめるようなコンテンツとなり、妖怪の個性豊かで親しみやすいイメージが確立された。『ゲゲゲの鬼太郎』と『妖怪ウォッチ』を筆頭に、現代では様々な作品で妖怪が描かれており、今後も妖怪たちは姿形を変えながら、日本人に愛され続けるだろう。